

雨の日と幻影

著者	小島, 紫葉
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 9
ページ	5 0 - 5 0
発行年	1915-12-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/6541

街頭の晩春

——舊作なれど時ならで熊本を去る吾れなれば——

二、三、甲 小島 紫葉

活動寫眞の赤びらの
路上を舞ひつ春の日の
くれ行くかなど

それも悲しや。

柳並木の葉の繁りは
埃に染みてうす白く
途上にたえずみ

泣けるがごとし。

かんらん、の茂る國はいかにと
ペーヴナントの上を歩きつ
ひとり思へる

日光はそよぎ。

中央公論の古本を買ひて

大切さうに抱いて歸れば
新屋敷の室の静けさ

だれも居ず。

雨の日と幻影

同

生けるものは皆大地に額づけり
ちろ／＼と若者の胸に燃え出づる火よ。

くすめる壁……

なまり色の空……

あはれ、感激は滅び、

輝けるものは消えゆく、

浸潤しゆく雨氣の

わが魂^{たましい}を虐げむとす。

これやこの、八月の

人間性の燃ゆるころ、

おされ行き、歩みし吾れは。

ほのぼのと明^あくると見しは。